報　告

ポルトガル，スペインの大学入試事情

研究開発部試験方法研究部門　岩坪秀一

1　はじめに

ポルトガル，スペインといえば，高校時代に日本史の授業で種子島の鉄砲伝来やイエズス会ザビエルのキリスト教布教活動等を学んだことを思い出す。わが国に西洋文化を初めて伝えてくれた両国であるにもかかわらず，その大学入試の実態についてはほとんど知られることがなかった。今回，文部省海外学術調査（研究代表者・坂元昂大学入試センター副所長）に参加して，平成５年９月18日から10月１日まで２週間，短期間ではあったが，両国の大学入試関係機関を訪問する機会が与えられた。大学入試事情の一端をエピソードなどを交えながら簡単にご紹介したいと思う。

スペインの人口は，日本のおよそ４分の１，ポルトガルの人口は，およそ12分の１である。しかし旧植民地の諸国に目を向けてみると，中南米諸国ではスペイン語が話されており，ブラジルやアフリカのいくつかの国ではポルトガル語が話されている。これらの事実から分かるように，両国の文化圏は極めて広い。実際に今回，現地で旧植民地出身と思われる人々を見かけたし，筆者自身マドリッドで『あなたはヒスパニック（日系人）か？』と聞かれたこともあった。将来我が国とラテン諸国との交流がますます増えていくことを考えると，これらの国々の源流である両国が，どのような歴史と文化を持っているのか理解することは重要である。とりわけ現在，いかなる人材を育てようとしているのか，大学入試の観点から見てみることは，その理解に大いに役立つと思われる。

マドリッドとリスボンという大都会での滞在が多かったせいもあるが，交通渋滞が東京並みであるのには驚いた。静かな都会だろうという出発前の予想はまったく外れてしまった。特にリスボンでは，至る所で道路の改修や建築工事が進んでいた。両国は，1986年１月から欧州共同体（ＥＣ）に加盟している。両国とも科学技術の振興に努めており，これをテコに経済の活性化を目指している様子を実感できた次第である。

2　ポルトガル

コインブラ大学はポルトガル最古の大学である。1290年創立というから，第２回目の元寇のころに当たる。カトリックの僧侶を養成することが目的であったが，その後いくつかの学部が加わり総合大学として現在に至っている。この大学は，長年ポルトガル唯一の大学であったが，1911年にそれまでに発展してきたいくつかの研究機関が学部として統合されて，リスボン大学とオポルト大学が設立された。1930年にリスボン工科大学が，そして1970年代までにリスボンカトリック大学，新リスボン大学など５大学が誕生した。1974年４月25日の革命以来，高等教育のみならず教育全般に大改革がなされた。

最近の特徴は，国が工業専門学校（日本の工専に当たるものか？）を全国的に設立して，中堅の技術者養成に力を入れ始めたことが挙げられよう。

2－1　ポルトガルにおける大学入試

大学入学者選抜は，革命前には高校における最終試験成績と大学・学部独自の入学試験成績を考慮して決定されたが，前者の影響の方が強かったようである。現在の大学入試は以下のようになっている。基本的には，高校成績を50点満点，大学進学試験（provas específicas）成績を50点満点として，両者を足し合わせて選抜に用いている。高校成績の内訳は更に，３つに分かれている。第10学年と11学年の成績が30点満点，第12学年（最終学年）成績と共通筆記試験（prova de aferição）成績とがそれぞれ10点満点である。最後の共通筆記試験は，公平性を保つために全国共通に出題されている。

大学進学試験も筆記試験であり全国共通である。これは，大学における専門教育を受けるだけの学力及び適性があるか評価するものである。わが国の個別試験に当たるが，異なる点は，国立と私立を問わず高等教育進学希望者は必ず受けなければならないこと，しかも全国共通の筆記試験ということである。

全国の大学，高等教育機関は，進学希望者に募集人員をあらかじめ公表する。そして学部・学科ごとに大学進学試験においてどの科目を受験すべきか指定する。大学進学試験実施後，文部省に所属する高等教育進学センター（Núcleo de Acesso ao Ensino Superior）は，高校成績と大学進学試験成績を足し合わせた点数を用いて，受験者を成績順に希望大学・学部・学科に振り分けていく。この処理はコンピュータによってなされている。次に受験者が希望どおりの大学・学部・学科に合格したか

否かを通知する。希望は最大６つまで出せるそうである。

大学進学希望者にとってより重要なものは，大学進学試験である。全国共通の筆記試験で科目ごとに大学教官２名と高校教員１名によって作題される。採点も教官から選ばれてなされているとのことであった。

２－２　訪問先から

高等教育進学センターのバプティスタ氏の話によると，今年（1994年）から入試制度が変わるとのこと。各大学は学生を独自に選抜できるようになる，そしてそれに伴いセンターも関係組織と合体するということであった。大学進学もなかなか厳しいようである。同席していた女性係官の息子さんは，経済学部に進みたかったのだが，点数が足りないために希望の国立大学に行けず，私立大学に入ったそうである。「学費が大変です」とは彼女の言であった。母親の悩みはいずこも同じである。

リスボン滞在中は，ちょうど大学入試の合格発表の時期に当たっていた。その現場が見たくなってホテル付近にあったのを幸い，新リスボン大学社会科学部に出かけた。入学願書の受け付け係の責任者の女性が，忙しいにもかかわらず遠来の客ということで親切に応対してくれてありがたかった。志願者の成績記入票，大学進学試験問題冊子を入手できた。哲学の問題を見ると，カントのプロレゴメナから出題されている。高校生にとっては少し難しすぎるのではないかという気がした。

その足で約束していたリスボン大学文学部のＪ教授を訪問。たまたま哲学の教授だったので，カントの問題冊子を見せて，かなり難しいのではないかと聞いてみた。案に相違して，教科書をきちんと理解しておけば容易に解答できる標準的問題ということであった。教授も何度か共通筆記試験問題の出題経験があるとのこと。教授の個人的見解によると，だんだん大学入試が学力偏重になりつつあること，しかしながら必ずしも学科にふさわしい学生を迎えてはいないことを嘆いていた。工業専門学校が出来て科学技術教育に力を注ぐのはいいが，肝心の教師数が足りない。また，大学進学者が増えているものの卒業後の就職状況も決していいわけではない，といかにも憂国の哲学者という風情であった。

校舎のホールには合格者の受験番号が張り出されており，数日前発表だったらしく眺めている学生の姿はまばらであった。

リスボンの書店で大学進学試験の問題集を購入。数学，物理，化学など，図や数式から想像するかぎり，我が国とほぼ同様な内容であるように思えた。

３　スペイン

スペインに大学が誕生したのも，はるか昔のことである。サラマンカ大学は1218年創立である。1430年にはバルセロナ大学，1500年にはバレンシア大学など現存の諸大学が設立された。大航海時代には大学も栄えたが，その後神学が自然科学よりも優位を保つ時代が続いたこともある。1876年，教育の自由が宣言され，これに盛られた理念は高等教育の発展に大きな影響を与えたといわれる。スペイン内乱時代を経たのち，1956 年以降大学は新たに発展の時代に入った。1970年８月に成立した教育一般法は，大学教育を生涯教育として位置づけ，高等教育の重視をうたったものである。1968年から1973年にかけて11大学が新たに設立された。現在は，バルセロナ大学，バルセロナ工科大学，グラナダ大学，マドリッド自治大学，マドリッド工科大学，バレンシア大学，バレンシア工科大学，サラマンカ大学など36の大学があり，その中にはカトリック系の大学も含まれる。わが国の放送大学に当たる国立通信教育大学（UNED）も1972年に誕生した。

３－１　大学進学準備課程（COU）

希望大学へ進学できるか否かは，大学進学能力試験の成績によって決まる。そのためにはまず大学進学準備課程（Curso de Orientación Universitaria：以下ＣＯＵと略記）に進んで共通科目と専門分野に必要な基礎科目を履修しなければならない。その後大学進学能力試験を受ける。これは，客観式テストではなく筆記試験である。

ＣＯＵには，大学における専攻分野を大別して，①理工学，②生命科学，③社会科学，④人文科学，の４つの履修コースが設けられている。どのコースに登録しようと，スペイン語（週３時間），外国語１科目（週３時間），哲学及び歴史（週４時間）の３科目は必修である。さらに大学進学希望者は，それぞれのコース独自の必修２科目と選択２科目（４科目用意されている）を履修しなければならない。コース別必修，選択科目は以下のとおりである。

①理工学コース
必修科目：数学Ｉ，物理
（各・週４時間）
選択科目：化学，生物，地質，製図
（各・週４時間）

②生命科学コース
必修科目：化学，生物
（各・週４時間）
選択科目：数学Ｉ，物理，地質，製図
（各・週４時間）

③社会科学コース
必修科目：数学II，現代史

（各・週４時間）
選択科目：文学，ラテン，ギリシャ，美術史
（各・週４時間）
④人文科学コース
必修科目：文学，現代史
（各・週４時間）
選択科目：ラテン，ギリシャ，美術史，数学II　（各・週４時間）

その他，各コース共通に任意科目として第２外国語（週３時間）が用意されている。

大学に進学を希望する高校生は，すべてＣＯＵにおける科目を履修して，大学進学能力試験の受験資格を得なければならない。３科目以上不合格だった場合は，ＣＯＵにおいてすべての科目を再び履修し直さなければならない。最初選んだコースが自分に合わなければ，コース変更も可能である。その際，すでに合格した科目は履修する必要はない。また職業高校からＣＯＵへ入る道も開かれている。

ＣＯＵは，イギリスの第６学年（The Sixth Form）に似ているように感じた。イギリスでは，大学進学希望者は，教育一般資格上級コース（GCE A Level）を得るために，更に第６学年で学ぶ生徒が多い。

３－２　大学進学能力試験

各大学（学科単位）は，受験者に対してその入学定員と大学進学能力試験として課す科目を公表する。

大学進学能力試験は，わが国の大学入試センター試験の日程と同じく，２日間にわたって全国一斉に行われる。一般的基礎学力を見る１次試験と専門的基礎学力を見る２次試験とからなる。

(1) １次試験：ＣＯＵの共通科目から出題

第１部
①文章読解　１問
②外国語理解　１問
（解答時間各問１時間，100点満点）
第２部
①文学鑑賞　２問中１問選択
②論理的分析　２問中１問選択
（解答時間各問１時間半，100点満点）
１次試験成績評価：４問の得点の平均

(2) ２次試験：ＣＯＵの必修科目及び選択科目から出題

第１部
必修科目　４問中２問選択
（解答時間各問１時間半，100点満点）
第２部
選択科目　４問中２問選択
（解答時間各問１時間半，100点満点）
２次試験成績評価：４問の得点の平均

総合評価は，１次試験と２次試験の成績を平均したもので最高100点である。大学に進学するためには，総合成績が50点以上でなければならない。したがって大学進学能力試験は，資格試験としての性格も持っていることになる。

３－３　訪問先から

マドリッド工科大学のセラノ教授とガルシア教授の話では，学科によっては競争がかなり激しいとのこと。毎年合格最低点が発表されるが，受験生はその度に一喜一憂するそうである。マドリッド工科大学通信工学科の昨年の合格最低点は77点であった。セラノ教授はその他の学科の最低点も示してくれたが，情報工学系がそろって高かった。ただ第２志望の学科に入学しても，１年間頑張って学内成績が良ければ，大学進学能力試験科目が同じであるかぎり，転科の道が開かれている。この点日本よりかなり緩やかなのかと思ったが，グラナダ大学で日本の大学では不本意入学の率はどのくらいか，と質問されたことを思い起こすと，スペインでもなかなか難しい問題のようである。

ガルシア教授の息子さんは，最初の年受験した大学進学能力試験成績は61点で希望の学科に行けなかった。翌年65点取って無事入学できたとのこと。浪人して頑張る若者もいるということである。

スペインにはアンダルシア，カタルーニャなど17の自治共同体がある。その共同体に居住している受験生は，ほとんどが共同体内の大学に進学する。文部省のオルティス氏によれば，大学進学能力試験における成績上位者10％は，希望すればどこの大学のどの学科でも，条件を満たせば進学可能ということであった。

スペインでもポルトガルと同じく，ちょうど合格発表の時期であった（大学の新学期は両国とも10月からである）。

大学本部の玄関近くに浮かない顔の若者がたむろしているので，セラノ教授に尋ねると，第１志望の学科に行けず，第２志望以下の合格待ちの受験生たちだとのことであった。心のなかで声援を送って工科大学を後にした。

ガルシア教授は，大学における一般教育の重要性を盛んに説かれた。将来の技術者を送り出す工科大学ほどそれは重要である。スペインは，大学の使命を論じた哲学者オルテガ・イ・ガセットを生んだが，今どきの若者は彼の著作をほとんど読みません，と嘆いていた。

文部省のオルティス氏に，客観式テスト導入の可能性を尋ねたが，当分筆記試験形式が続くであろうが，年々大

学進学希望者が増えているのでいずれ真剣に考える時期が来るかもしれない，ということであった。スペインでも本年度（1994年）から大学入試制度が変わる。各大学は新しい教育カリキュラムを提出しなければならない。具体的にどう変わるのかオルティス氏に質問したが，複雑でとても外国の方には説明しきれない。資料を読まれたい，と官報のコピーを何部かいただいた。

グラナダ大学では，留学生課のグスマン氏と会う機会があったが，ヨーロッパ諸国のみならず，アジア諸国との交換留学生制度を促進していこうという氏の熱意に打たれた。コインブラグループといってヨーロッパの30大学が参加して大学間で教官と学生の交流を行っている機関がある。異なった言語，文化を持つ若者たちが，互いに意志疎通を図ることは国際理解に資すること大なるものがあろう。ヨーロッパの大学の持っている懐の深さというものをしみじみ感じた。

4　おわりに

両国の大学入試制度一般について，今回感じたことを思いつくままに列挙してみよう。

(1)　大学に進学する若者の数は，年々増えている。女性の進出も目ざましい。

(2)　両国とも高等教育の充実が国家の発展にとって不可欠であると強く認識していることはいうまでもない。特に科学技術教育に重点を置いている。ポルトガルの悩みは，その分野の教官数が不足していることである。

(3)　同時に，新興の理工系分野の攻勢と哲学など伝統的分野の守勢にうかがわれるように，せめぎ合いも存在するようである。

(4)　大学入学のための競争は，両国ともに熾烈である。

(5)　大学進学者は，全国共通の筆記試験を受け，主にその成績順に希望学科に振り分けられる。

(6)　全国共通の筆記試験問題は，大学教官と高校教師が協力して作成する。客観式テストは両国とも導入していない。しかし，大学進学希望者が増えれば導入の可能性がある。

今回両国の大学入試関係機関を訪問して，『効率』ということが大学教育でも重視され始めていることを痛感した。これは世界的傾向にあるのではないか。もちろん無駄を省き，国の繁栄に資するべく合理化を進めていくことは大切であろう。しかし一方，その流れの中で，高等教育の理念にかかわる大事なものを失うことがないように，われわれは懸命に知恵を絞っていかなければならないのではないか。そんな思いを抱きながら最後の訪問地マドリッドを後にした。